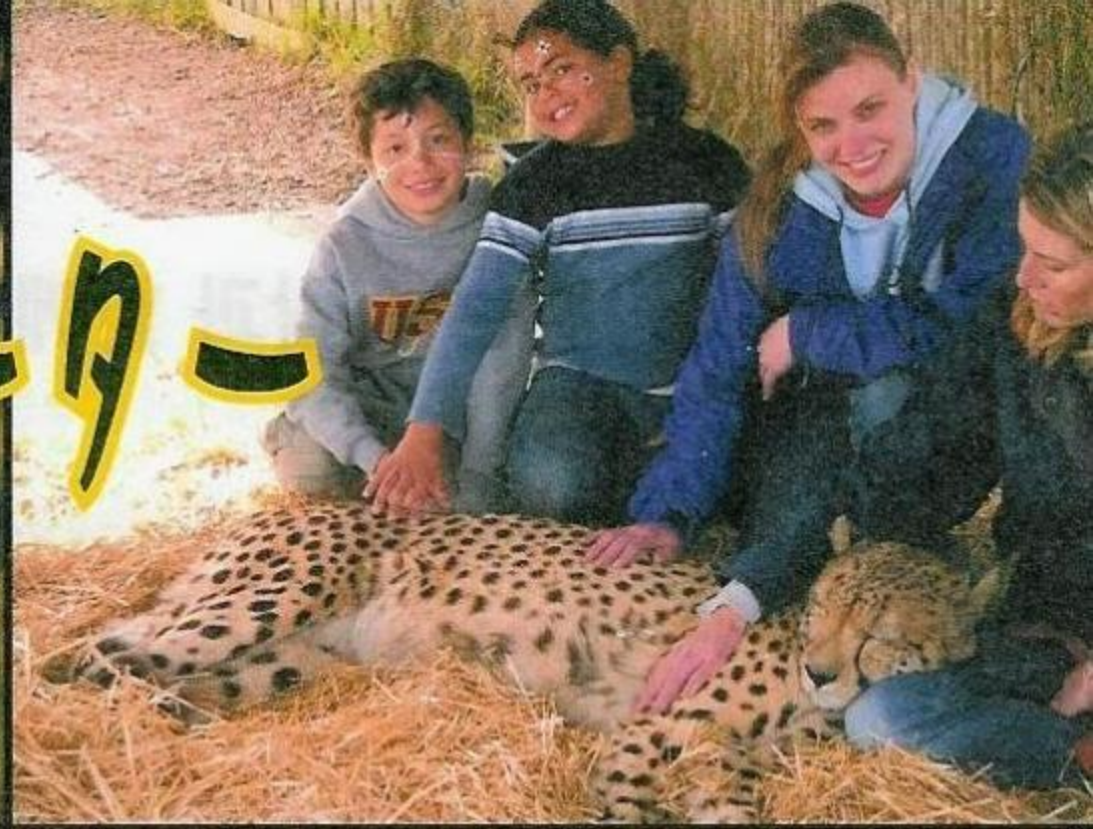


© FRANTISEK STAUD
WWW.PHOTOTRAVELS.NET



チーター

皆さん！こんにちは！JCCSの渡邊です。

前回のチーターの記事にかなりの反響があり、もう少しチーターに関して知りたいという方がいらっしゃったと編集部の方にお伺いしました。皆さんにまたお会い出来てとても嬉しく思います。

前回は、チーターの保護専門団体を立ち上げた動機についてお話をさせて頂きましたが、今回はもう少しチーターの現状やCCFの活動に関してのお話をご案内したいと思います。

意外な事ですがチーターの祖先は元々400万年前に北アメリカの大平原に誕生したと言われていています。それが、アジア→ヨーロッパ→アフリカに流れて来ました。

現在のチーターは、今まさに絶滅の危機に瀕していますが、過去にも一度、絶滅の危機を迎えた事がありました。

今から1万年前の氷河期にチーターは第一回目の苛酷な自然環境による絶滅の危機を迎え、氷河期を生抜き絶滅を近親交配しながら繁殖、その結果として遺伝子のよく似ているクローン状態となり、奇形がとて多くなりました。

動物は遺伝子の多様性が失われると、病気や死に対する抵抗力が弱くなると言われていますが、これもチーターが減少している一因とされています。*JCCSが支援している**CCFでは捕獲繁殖計画のもと、チーターの交配が試みられましたが、多くの雄がすでに同系交配が原因で質の低い精子しか持っておらず、一般の家ネコの1/10程度しか正常な精子がなく繁殖に支障をきたしています。

昔は4大陸に100万頭以上生息していたチーターですが、現在は、アフリカ大陸と、ごく僅かな50頭ほどのアジア・チーターがイランに生息しているだけになってしまいました。CCFの調査によれば、野生のチーターはアフリカとアジアの両方を併せても9000頭から1万2000頭たらずしか残っていないと推定されています。また、2000頭あまりが、人間の飼育下で飼われています。

最近ではチーターが絶滅の危機にあるという事を動物関連のTV番組でも、ごくたまに放送していますが、間違った情報を伝えている物もあり、それが更に一般視聴者へのチーターに対する見方を良い方向ではなく、肉食で近付いたら襲われたり、食べられてしまうのでは？というようなイメージに作られてしまっているものも少なくありません。

アフリカのチーターの生息数世界一を誇るナミビアのチーターは、ケニアのマサイマラ国立保護区にすむチーターとは違い、その大多数が保護区に指定されていない場所に暮らしています。(ケニア全体でも野生個体数は既に50頭を切っていると言われていています)しかし、いくらチーターの生息数が多いとはいえ、人間が増え、本来チーターや他の動物のエリアであった場所にまで人間の農地がチーターを脅かし、衝突が避けられない状況になっています。また小型のレイヨウなど、チーターが本来エサにする動物たちも減少していますが、一時期、こうした要因から、チーターが農場の家畜を襲うようになり、1980年代にはナミビアだけで農民たちが7000頭以上のチーターを殺しました。この結果、CCFによれば、ナミビアに生息するチーターの数は半減したと言います。

こうした衝突を避ける為にCCFは1991年以降、農民たちと協力し、新たに家畜を育て、野生動物の管理法を策定し、チーターをほかの土地へ移動するなどの活動に取り組んだり、前号でも紹介したように、チーターが農場に迷い込んで家畜に近付いた時には家畜の保護犬(見張り犬)としてアナトリアン・シェパードが吠えてチーターを追い払い、家畜を守りながらもチーターの命をも守るという一石二鳥のプロジェクトを導入しました。

また、CCFではチーターの保護報奨制度を設けて、チーターを迫害しない農民が利益を得られるようにしたり、農民たちが助け合いながら野生動物と共存し、チーターの生息地と捕食地を確保できる保護区を作ることを目指すと共にチーターの捕獲繁殖計画の推進のため世界中のチーターから採取した精子を用いて人工受精を試みブリーディングもしています。

それではナミビアの状況がCCFの出来る以前から出来た後でどのように変わったか簡単にお話ししましょう。

ナミビア共和国の農場主の大半はドイツ人3世かアフリカ諸国からの移住者が殆どで彼等の祖先は、不毛の土地を現在のような牧畜農場にするまでに多大な苦勞をして来ました。

その為、ナミビアの農場主達は、先祖代々受け継がれて来た土地に対する愛着心がとても強いと言われていています。農場主達にとって、自分の牧畜を脅かす野生動物はチーターに限らず射殺するのが当然の事でしたし、ナミビアの法律では当然の権利として容認されてもいました。